

6-6			
主題	特養におけるNST(栄養サポートチーム)の取り組みについて		
副題	NSTを利用した多職種協働の実践と効果		
多職種協働	NST（栄養サポートチーム）	研究期間	24か月
法人名	同胞互助会		
事業所名	特別養護老人ホーム 愛全園		
発表者：	中嶋 直樹・中野 もも (なかじま なおき・なかの もも)	アドバイザー：	蓮村 友樹久 (はすむら ゆきひさ)
共同研究者：なし			
電 話	042-541-3100	FAX	042-546-8284
今回発表の事業所やサービスの紹介	当施設は、東京都多摩地区昭島市に位置し、特養の他に養護老人ホーム、短期入所、通所施設、訪問介護、居宅介護支援センターの各事業を行う福祉施設である。また、特養には診療所が併設されており、医師が常勤し、医療が密接にかかわっている。		

《1. 研究前の状況と課題》

当施設は、多職種（介護職、相談員、医師、看護師、管理栄養士、機能訓練指導員、外部訪問スタッフとして歯科衛生士、歯科医師）が働く特養施設であるが、情報共有の場が月に2回(ケース会議・連絡会議)と少なく、前述した職種が一度に全て集まる機会はなかった。医師にとっては治療のために、即座に報告してほしい症状や出来事があったにもかかわらず、病状についての詳しい認識の周知が薄かったがゆえに報告が遅くなってしまうことや、介護現場からの問い合わせへの回答も時間がかかる事があった。また、他職種と話をする機会が少なく、ご利用者に変化が生じた際、職種ごとの狭い見解となり易い。後から他職種からの報告を得て、バラバラだった情報が繋がり、初めて課題の全体像が見えた事もあった。

こうした背景があり、Nutrition Support Team：栄養サポートチーム（以後NST）を導入する事となった。

《2. 研究の目的ならびに仮説》

NST は主に医療現場において医師や管理栄養士、薬剤師、看護師、臨床検査技師などの専門スタッフが連携し、それぞれの知識や技術を持ち合い、最良の方法で栄養支援をするチーム医療の一つである。病院では一般的に行われているが、特養でも NST は、ご利用者のケアの向上に効果があると考えた。生活の場であり、終末期まで向き合える施設だからこそ、継続してフォローすることができる。特養での NST の意義は大きいのではないだろうか。

《3. 具体的な取り組みの内容》

平成 23 年より常勤医を中心に週一回、多職種での「皮膚・栄養ラウンド」を開始した。平成 25 年からは、栄養課が「愛全園NST」としてラウンドの運営を引き継ぎ、チームでの介護・医療に取り組んできた。

「愛全園NST」の概要を以下に示す。

・参加職種
管理栄養士、介護職、相談員、医師、看護師、

機能訓練指導員、歯科衛生士（外部スタッフ）、施設長等。

- ・日時：毎週水曜日 11 時より 1 時間程度
- ・対象者

ラウンドの対象者は全利用者であるが、新入所（入所後 2 週間以内に介入）、食欲低下、体重減少、病態変化、褥瘡、看取り対応中の方を中心としている。その都度、管理栄養士が中心となって介護・医療・相談員と相談しながら決めており、ラウンドの予定者を更新した際には、予定表を各部署へ配布している。1 回のラウンド人数は 2～4 名程度。

- ・ラウンドの流れ

①対象者の居室前にて各職種より情報提示
②ケアの方向性について議論
③利用者とのコミュニケーション、処置・診察等

④まとめを行いケアの方向性を決定

- ・栄養状態の評価指標

体重（長期的な経過をグラフ化して使用）、血清アルブミン値などの血液検査 等

本研究での NST はカンファレンスを会議室ではなく、ご利用者の生活空間にてスタンディングで行う事に特徴がある（もちろん、プライバシーについての配慮は必須）。多職種が顔を合わせ会話で情報交換をし、居室にいるご利用者に実際に会い、お話を聞き、様子を確認する。

《4. 取り組みの結果》

NST がかわることで著明に栄養状態や病態の改善が得られた症例が多く見られた。また、体重だけでなく褥瘡の経過や精神状態へも効果があり、QOL の保持・増加に有効であると考えられた。また、最期を迎える方に対しても、ご本人の一番好きなものをご家族と相談し個別対応でお出しする看取り食（愛全園食）や、ご本人のしたかったことやご家族の希望の実現に向けてチームで取り組むことができた。

《5. 考察、まとめ》

NST 活動を通して、多職種間での情報共有の場が増え、利用者への対応のスピードが増すことで、より良いケアへ繋がり、ご利用者の栄養状態や病状の改善に貢献したと考えられる。

NST を特養で行う利点として以下の 4 点が挙げられる。①医療現場と異なり長期的な経過で何度も介入できること。②生活の中で経過を見る事ができること。③利用者のやりたいことの実現に貢献できること。④褥瘡、看取り、ミールラウンドや嚥下内視鏡による食形態評価、ご家族との関わり等、様々な多職種協働の場面の中心として NST を活用できることである。生活の場である施設にも NST は必要であると考えます。

《6. 倫理的配慮に関する事項》

本研究発表を行うにあたり、症例で提示するご本人（ご家族）に口頭にて確認をし、本研究発表以外では使用しないこと、それにより不利益を被ることはないことを説明し、回答をもって同意を得たこととした。

《7. 参考文献》

「フードケア最前線」『ヘルスケア・レストラン』2015 年 7 月号 p p 78－81.
日本医療企画

《8. 提案と発信》

NST の取り組みは、職員間の心理的な壁を取り除くきっかけにもなった。週一度の NST 以外でも、『小さな NST』ともいえるような多職種間でのカンファレンスが日々、生まれている。それは、チームの一員として、多職種で連携しながらケアを進めていくことが、より良いケアへ繋がることを職員一人一人が感じている証拠ではないだろうか。

また、NST で多職種の意見を聞くことや自らの専門について意見を述べることは、自らの専門をより意識することへも繋がり、成長やモチベーションの向上にも繋がると感じている。NST を中心に今後もさらなるケア・サービスの向上につなげていきたい。